

続きまして、介護ロボット導入までの道のりと事例と題しまして、パネルディスカッションを開始いたします。

本日も登壇の皆様をご紹介させていただきます。

パネリストに、介護老人保健施設雪見野ケアセンター、小高輝代様。

特別養護老人ホーム杏樹苑爽風館、落合広之様。

介護老人保健施設蓮田ナーシングホーム翔裕園、影山拓海様。

ファシリテーターに、株式会社エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所、情報未来イノベーション本部、先端技術戦略ユニットマネージャー、足立圭司様にご登壇いただきます。

それでは、ここからは足立様に進行をしていただきます。

足立様よろしく願いいたします。

はい、ありがとうございます。

改めまして、エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所の足立と申します。

ここからは介護ロボット導入までの道のりと事例ということで、三名のパネリストの方をお招きしまして、パネルディスカッションをしていきたいというふうに思います。

それでは、パネルディスカッションに先立ちまして、一言ずつごあいさついただければというふうに思います。

まずは雪見野ケアセンター小高輝代様、お願いいたします。

雪見野ケアセンターの介護副主任の小高と申します。

平成13年に設立され、所沢市の緑が多く、自然豊かなところにあります。

当施設は多床室で、二階三階合わせ100名、デイケアは定員40名の介護老人保健施設になります。

介護ロボットは、キング通信工業株式会社様のシルエット見守りセンサーを導入しております。

本日はよろしく願いたします。

はい、ありがとうございます。

続きまして杏樹苑爽風館の落合様、願いたします。

はい。

特別養護老人ホーム杏樹苑爽風館の相談課長の落合と申します。

爽風館はユニット型の特別養護老人ホームになりまして、特養部分が100床、それからショートステイのほうで20床ですね、ある施設になります。

介護ロボットを複数導入しているんですけども、モデル事業のほうでは、パラマウントベッド株式会社様の眠りSCANのほうを使用させていただきました。

本日はよろしく願いたします。

はい、ありがとうございます。

最後になりましたけども、蓮田ナーシングホーム翔裕園の影山様、願いたします。

はい。

蓮田ナーシングホーム翔裕園の介護課主任をやらせてもらってる影山といいます。

当施設は平成9年に蓮田市に設立された老人保健施設で、ロボット等が導入された部署は、従来型の、計100床の二階三階ともに50床ずつの老健施設となっております。

導入したロボットなんですが、富士ソフト株式会社さんのコミュニケーションロボットのPALROを導入しております。

本日はよろしく願いたします。

はい、ありがとうございます。

本来であれば、このお三方に加えまして、三郷さくらの杜のスタッフの方が来ていただく予定でございましたけども、本日はちょっとご都合によりご欠席ということでございますので、この三名と私足立で進めさせていただければというふうに思います。

では早速ですね、ディスカッションのほうに移って参りたいと思います。

まずはですね、お聞きしたいところがございますのは、まず導入のきっかけについてお伺いしたいと思います。

どのようなことがきっかけで、この介護ロボットの導入を検討することになったのか、それぞれあると思いますので、それぞれお答えいただきたいというふうに思います。

まずは小高様はいかがでしょう。

はい。

今回のプロジェクトは当施設の事務長が見つけて、それでやってみようということで、導入しました。はい。

はい、ありがとうございます。

落合様いかがですか。

はい。爽風館はその前にサイバーダイナ社さんのHALという介護ロボット、この装着型のだったんですけど。

その実証実験のほうにも参加をしておりましたので、この話を理事長からいただいた時に、また別のプロジェクトチームを作ってやろうやろみたいな感じで参加をさせていただいた次第です。

はい、ありがとうございます。

影山さん、お願いします。

はい。

事務長より、当時の事務長より、企画を承って、面白そうだなというところから、現場の業務も切迫している中で、何か、介護職員、利用者ともに何か手助けになるものが入るのであればと思い、参加させていただきました。

ありがとうございます。

お三方ともこういった補助事業を上の方から聞いて、参加しようということで始まったということでございますね。

それではですね、介護ロボットを導入していく時には、プロジェクトメンバー、どのようにして決めていったのか、プロジェクトを立ち上げたということでお聞きしておりますけども、

メンバーはどのように選んでいったのか、その経緯をちょっと教えていただければと思います。

それじゃあ、影山さんからお願いできますか。

はい。

プロジェクトメンバーの中には、自分が総括してということで、発信と指導の意味を持たせていただきまして、進めさせてもらいました。

プロジェクトには、各フロアの副主任を選抜しまして、その中から、また日勤帯、そのロボットの使用する頻度が多いところからと、またそれを使いこなせそうな人ということで、選抜させていただいて、プロジェクトを進めました。

なるほど。ありがとうございます。

落合さんいかがですか。

はい。

爽風館のほうは、ユニットが12個あるんですけども、大体二つずつ、対になっているような建物の構造をしておりましたので、どうかその二つのユニットを使って、やってみようみたいな話は最初からあったんですね。

それぞれのフロア、三階あるんですけどもまあ、係長に内容を振ってやってみたい人ということで、やってみたいというふうに手を挙げてくれたところの、そうですね、係長を中心に、看護師と、相談員の方でサポートするような形で、現場を巻き込んでプロジェクトチームを作ったという形ですね。はい。

ありがとうございます。手挙げ制で選んでいったということなんですね。

そうですね。

結構集まりましたか。

どうでしょうか。

やっぱり日々の業務が結構忙しいので、若干そうですね、施設長からの圧は感じてたんじゃないかなと思いますけども、その中でも、ちょっと楽になるかもしれない、負担が減るかもしれないところが後押ししてくれたかなと思いますけど。はい。

はい、ありがとうございます。

小高さん、お願いします。

はい。

事務長がですね、最初にやっぱりリーダーと副、サブリーダーを決めまして、それから現場の意見が反映できるような職員を選びました。はい。

なるほど。

最初は事務長さんが、

そうです。

プロジェクトリーダーと、サブリーダーですか。

そうです。

お決めになって、そこからメンバーを決めていったということなんですね。

そうですね。

とりあえずすべて介護職と、ナースさんとかも入ってのプロジェクトチームになりました。はい。

わかりました。ありがとうございます。

それでは次の質問でございますが、プロジェクトのミーティング、結構大変だったと思います。日々の職場の中でその時間を捻出するのは大変だったと思いますが、どのような頻度で、だいたい何時ごろ集まってみんなでミーティングしたのか、その実態をちょっと教えていただければと思います。

落合さん、どうですか。

はい。

爽風館では、毎週火曜日の11時から11時半というふうにもう最初から決めて、そこにミーティングを行うということでやりました。はい。

もちろん現場の状況が大変な時なんかは、流れたり午後になったりすることもありましたけれども、そうですね、日中の時間は結構、非常勤、パートさんなんかもある時間で、お昼ご飯は忙しいから、その直前ぐらいだったらって現場の意見を聞いて、はい、それで開催をしていたような形です。

ありがとうございます。

週に1回のピッチでミーティングを設けられたということなんですね。

そうですね。はい。

わかりました。

影山さんどうですか。

うちの施設でもともと福祉機器の導入委員会というのがありまして、その中でお話しする機会が月に1回ありまして、進めていく中で、必要な時があれば、その時の勤務表で確認しながら、時間を合わせてという形でやっていたので、とりわけその会議ではない時間帯というと、集まれる時間帯というところで、フラットにやっていたと思います。

なるほど。

月に1回の固定の委員会があって、それを待たずに議論したい場合は随時柔軟に、皆で集まっていったというふうなスタイルですね。

はい。

ありがとうございます。

小高さんどうですか。

やっぱり私の施設では業務の時間外に集まって、ミーティングってことはできませんでしたので、職員はみんな夜勤の明けか、休みを利用して、朝のだいたい10時ぐらいからお昼も取らないで、3時、15時ぐらいまでやっておりました。

あとは個別にですね、個別に会議のほうはやっておりました。はい。

はい、ありがとうございます。

ご覧のように三者三様でございますね。

いろんな工夫をしながらその施設の事情に合わせてミーティングを組んでいたということかと思えます。

そのミーティングというかこのプロジェクト自体ですね、介護ロボットの種類によってもかかる時間、導入にかかる時間というのは違ってよいかと思いますけれども、どのような、どれぐらいの期間でこのプロジェクトは行われたのか、そのあたりをお聞かせいただければと思います。

これは小高さんいかがですか。

そうですねプロジェクト、事務長のほうから聞いたのが本当に、7月とかその一番最初に集まった時期だったので本当に7月から、やっぱり最後の1月ですね、1月に発表があったので、それまでのプロジェクトチームに、なりました。はい。

7月から1月まで。

はい。そうです。

約半年ぐらい。

そうです。

だったんですね。

はい。

影山さん、いかがですか。

はい。

先ほどもお話にあったと同じようになるんですが、7月頃に、やはりお話をいただいて、そこから計画を立ててというところを順繰りやっていまして、導入からその発表にこぎつけるまで、やっぱり7月から1月いっぱいまでかかってやっているかと思い、やっていました。

はい。

わかりました。

影山さんところはPALROですね、コミュニケーションロボットを導入されたということでしたけども、1月以降は活用されていますか。

そうですねと主にレクリエーション等で活躍してる場があったりはするんですが、行事とかで、来賓お客さんが来る時に、来てるお客さんを楽しんでもらえたりというところをちょっと期待はしてたんなんですが、ちょっとコロナ禍で、なかなか外から呼ぶということが難しくなってしまったために、館内の使用が主になっています。

わかりました。ありがとうございます。

落合さん、お願いします。

期間ですか。

はい。

はい。うちも7月からですね。

だいたい11月ぐらいで、とりあえずいろんな検証を終えて、1月の発表に向けたまとめみたいな感じで、進めていきました。

ありがとうございます。

昨年プロジェクトは1月にご報告の会議がありましたので、そこでご発表がありました。

そこに向けて資料作りなんかで、委員会プロジェクトをやっていくということでしたけども、私が感じておりましたのはだいたい11月ぐらいですね、に、ほぼほぼ導入活用のところまでこぎつけて、あとはもう資料作り、というところに入っていったのかなというふうに思っておりました。なので、実質的には、短期集中でやって7月から11月ですが、3ヶ月4ヶ月ぐらいの勝負だったかなというふうに思っております。

ありがとうございます。

プロジェクトで最も苦勞したことを或いは失敗したこと、こういったあたりがちよっと皆さん聞きたいところなんですけども、失敗したこと、何でも結構です。

教えていただければと思います。

これは小高さん、いきましようか。

そうですね、失敗したということより苦勞したことがいっぱいありまして、本当にうちの施設はロボットって何っていうところから始まった施設なので、そこからいわゆる、もうロボット自体を探すのが本当に大変大変で、それをどう、どうやってこのプロジェクトを進めていったらいいのかっていうのが、本当に悩みました。

で、やっぱあとプロジェクトチーム内でもいろいろな意見があったりとか、あとプロジェクトチームに入っていない他の職員からも、やはりいろいろな意見をいただきまして、それをどのように生かしてまとめていったらいいのかなっていうのが、とても苦勞しました。はい。

それであと、エヌ・ティ・ティさんからいろいろ言われましたので、それも結構大変でした。はい。

はい。

正直な気持ちです。はい。

ありがとうございます。

小高さんのところは、最初見守りのシステムを入れられる際にですね Wi-Fiを導入するところから、でしたね、Wi-Fiを導入してから見守りのシステムを入れるということでちょっとツーステップあって、大変ご苦労されたのは今でも覚えております。ありがとうございます。

苦労されたことを失敗したこと、影山さんいかがですか。

はい。

もうロボットの使用に関してというところを、周知するのが何より大変だったかと思います。

マニュアルは作っていたんですが、それを触れる機会が、ない、少ない、職員などはなかなか使う、使い方、使用の仕方というのを、やっぱり説明書見ただけでは、使いきれないので、そういったところで、どうやって解決していくか、またそれを一応日誌として作っていたんですが、プロジェクトメンバーからの返信というか返事をする機会を設けていなかったのに途中で気がつきまして、その気がつくまでの期間で、もったいなかった時間を過ごしてしまったというのを、今思えば感じております。

プロジェクトメンバー外とのコミュニケーションということでしょうか。

プロジェクトメンバーが吸い上げた問題点を、使ってる人たちにフラッシュバックするというか、こういう問題にはこういう解決方法があるよっていうのを、なかなか周知をする、その個人については、していたんですが、全体にというところで、不足があったようで、途中から日誌の中に、あった問題に関しての返事を書くという欄を設けて、そこは解決してるんですが、その出だしで遅れてしまったかなというところ。はい。

なるほど。

ありがとうございます。

そういった小さな課題とか小さな成功というものを日誌に貯められて、それでコミュニケーション取って行って、全体に周知していったということなんですね。

ありがとうございます。

落合さんいかがですか。

はい。

うちでは、現場の職員さん、モチベーションの維持ってところが一番大変だったかなあって思います。

やっぱり現場ぎりぎりやってるので、その中で、うち、課題が5個ぐらいあったので、それをもうちょっと欲張って全部眠りスキャン使っ
てどうなるかを検証してたんですけど、その、汚染、排泄介助の、汚染の回数を数えとか、30分おきに巡視をして、状態を見
て、実際どうか見るとか、いろいろやってもらうことが増えちゃったんですね。

その割に結果がそんなに最初出なかったので、アンケートもとってたんですけど、その中で何か、期待は感じないことはないけど、何
かそんなでもないのかなみたいな、やっぱり話が、そうですね、出た時には、ちょっと熱が冷めたのを、みんなの熱が冷めたのを感じ
たので、そこを盛り上げていくのが難しかったかなというふうに思いますね。はい。

はい。ありがとうございます。

大事なことだと思います。

プロジェクトを遂行していく中で、やっぱり先ほどの鈴木施設長のご講演にもございましたけども、やっぱり試行錯誤する中で一時
的に生産性が下がるというようなところが必ず出てくると思うんですね。

そういった時にプロジェクトメンバーの方と、現場の方との温度差といいますか、そういったところが表面化してくるフェーズは必ず、ど
のプロジェクトでも、きます。

そういった時にやっぱり、管理者層の方、施設長とか事務長さんからのサポートって非常に大事だと思うんですね。

そういったサポートは、落合さん、得られましたか。

うーん、そうですね。

もちろん全面的なサポートはしてくれてたとは思いますが、何だろうな。

もうちょっとプロジェクト頑張ってる、プロジェクトメンバーのみんなに、頑張ってるじゃんってのが欲しかったかなっていうのは、12ユニッ
トあるって言ったんですけど、全体の会議なんかの時に、例えばプロジェクトの進行状況とかだったり、そういったものをちゃんと

発表して、ああそういうことを今やってんだね頑張ってんねみたいなのが、他のリーダーたちからも、プロジェクトに参加してるユニットの子たちにあつたら、よかったかなあと今反省ですけど、本当にクローズドでやってたので、何やってるかいまいちわかってない、他の階のパートさんとか、結構いたと思うので、うん、そういうところは、反省かなと思います。

そういった別のフロアの方も含めて施設全体でどう盛り上げていくのかとか、モチベーションをコントロールしていくのかっていうのが次の課題ということなんですね。

はい、ありがとうございます。

小高さんどんなご協力をいただきましたか。

はい。

事務長もですね、一応プロジェクトチームの中に入っておりましたので、私たちの進行、具合だとかはいつもチェックしていただいております。

で、やはりプロジェクトチームは休みの日とかで出勤していたので、やはりその点もすごくいろいろ、買ってきてくれたりとかですね、ちゃんと応援してくれまして、やっぱり事務長は私たちは今何をやっているのか何につまずいているのかっていうのを、やはりちょっとちゃんと気づいてくれて、ちゃんとした意見、意見というんですかね、言っていたのでとても助かりました。はい。

雪見野さんのところで私の記憶にあるのは、プロジェクトが頓挫ではないですけども、選択肢AとBで別れたときに、議論になった時にですね、意見が分かれた時にその時に、もともとこのプロジェクトはじゃ何のためにやるんだっけっていうことを立ち戻らせてくれたのが、事務長だったというふうに記憶しています。

そういった言葉によって、どういった介護を実現したいのか、介護ロボットを導入してどんな介護を実現したいのかといったようなところに立ち戻って、選択肢を、また新たに決めていった、といったような場面があったと思います。

非常に記憶に残っています。

はい。翔裕園さんの場合はどうでしょう。

うちの施設では、その当時の事務長が、結構面白そうにやっていたところが私の印象にはあって、現場の使用に関しては、ほぼほぼもう現場に任されていたというか、何か問題があったら、解決できるような手を考えるのが、現場でいうところで行っていた中で、ロボットを使っていきますよ、施設として使っていきますよっていう声を、上げていたっていうのは、何よりもやりやすかったところかなあ

と感じております。

わかりました。ありがとうございます。

ここからは実際の取り組みについて、少し話を深掘りしていければなというふうに思っております。

課題をどのように見える化していったのか。これが結構プロジェクト全体通しての大事な、大事なところかなというふうに思うんですが、課題の洗い出し、そしてその洗い出した結果についての感想、気づき、そういったところを含めて、教えていただければと思います。

落合さんこれどうでしょう。

はい。

私この一番大事なその課題の洗い出しの時私不参加だったんですけど、あとから聞いたんですけど、メンバーになった5人ぐらいかな、集まって、今大変なことみたいなのを、付箋に書いて、ブレインストーミングの形ではいはいってどんどん出していったのを、カテゴリーごとにまとめてって、やりましたね。

5つぐらいありましたけど、だいたい結構、その共通して大変だっていうのはやっぱり多く集まったので、それを優先課題にしながらやっていこうみたいな、そんな感じでやりました。

どんな課題が見える化されたか、一つ二つ覚えてらっしゃいますか。

はい。

やっぱり夜間の人員配置が20人に1人なので、あと爽風館ができた27年の4月から、介護度1,2の方がいらっしやらない。重度の方がやっぱり対象になってくるので、介護の、自体も大変な方はいらっしやいますが、それ以上にリスクが大きいと思うんで、夜間の急変の心配だったりとか、それをもし見てない時に、万一のことがあったらとか急変をされたらっていうような、そういう精神的な負担っていうのが結構大きいんだっていうのがありましたね。

それからなんでしょう、ユニットケアをやっていかなければいけないわけですけども、なかなか自分で自分の意向を伝えられない方の介護っていうところがやっぱり画一的になってしまう部分っていうのは、ちょっとジレンマを感じている職員が多かったんですね。

なので、ちょっとうちの導入した眠りSCANだと、目で見るだけだとわからないことだったりとか、寝てる時の様子だとか、そういったも

のを含めて、夜間の様子もわかるからそういったものを使えば、本人の生活リズムを把握しやすくなるんじゃないかと、ユニットケアの一助になるんじゃないかと、そういうような、期待というか課題というか、そういったものが、印象に残ってます。

なるほど。

ありがとうございます。

小高さんいかがでしょうか。

私の施設では、職員全員にアンケートをとらせていただきました。

その中で、一番多かったものを今回介護ロボットということで導入させていただきました。

なるほど。職員全員にアンケートのようなものを取ったということですね。

その中から、分けましてピックアップしまして一番多かったやつが、今回の、ロボットになりました。はい。

うちの施設では本当従来型の施設で、ピッチがないんですね。

なくていう横に長い施設になっておりまして、そのナースコールを知る手だてとしては、ステーション内にある、なんていうんですかね、そういうあるんです。

ナースステーションまで戻ってそこで目で確認するか、各居室の前の、電気で、確認するしかない方法しかなかったので、みんなやはり無駄な訪室っていうんですか、夜間に、いわゆるベッドセンサーが鳴って、目に見えるものがないからとりあえず行く。

そしたら、ただ単に体動だったっていうのが本当に何回もありまして、それはやっぱり職員のかかなりの負担になっておりまして、その今回その課題ですからやはりそれがかなりの多くの課題に挙がってましたので、今回ロボットで、シルエットにさせていただいた、いただきました。はい。

導入効果はいかがでした。

導入効果はもう本当すごいです。

今まで無駄な訪室っていうんですか、それが無い時には大体夜間中に20回から30回ですね、行って空振りだったことがあった

んですけども、シルエットを本格導入しましたら、いわゆる無駄な訪室っていうのが、ほぼ、ちょっと三階の認知棟のほうには何回かあったんですけども、二階の、ほうに関して一般棟に関しては、ほぼゼロになりました。

1回も訪室せずにその画面で確認をするっていうことができるようになりました。

はい、ありがとうございます。

職場の課題を分析してみでの感想や気づき、影山さんいかがですか。

はい。

そうですね、この事業でのキックオフ研修会のために用意したアンケート、やはり現場職員に書いてもらい、それを見返してみると、ちょっと業務の切迫してわからなかった部分が浮き彫りになって、問題点というコップを洗うとか、薬を配るところで、もう出ていたんですが、何よりも介護現場の職員が心配してたのがご利用者の不活発な生活の習慣というのを心配していて、レクリエーションをやるところができないっていうそのプレッシャーと戦っていることに、多くの職員が戦ってることに気が付いたっていうのが、見える化してよかったかなと思います。

思っております。

はい、ありがとうございます。

いかに課題の分析っていうところが重要かということがよく分かったと思います。

ちょっと時間が迫って参りましたけども、最後の質問をさせていただきたいというふうに思います。

プロジェクト全体を通して、施設での変化だったりとか、個人の変化ですね、学んだこと、収穫、感想、そういったことをちょっと一言ずついただければと思います。

影山さんお願いします。

はい。

当施設で入れたコミュニケーションロボットなんですけど、はじめエヌ・ティ・ティ・データさんにもなかなかデータ化するのは難しいんじゃないかというところで、いただいて心配しながら導入だったんですけど、やってみるとですね、落ち、その使用頻度落ち込んだところか

らの盛り返してからは、すごい今まででなんでやらなかったんだろうっていうぐらい、余暇活動に対するレクリエーション、への取り組みがしっかり行えるようになって、今ではもう毎日、職員からの提供するレクリエーションが行われています。

その中で、人数体制とかもそんなに変わっていないので今でも、何でできなかったのかなって思うと、やっぱりやらなかったことでレクリエーション、のやり方がわからなかった職員が結構いたのかなっていうのを今感じております。

そういうところで PALROを使うことによって、どうレクリエーションへの導入のところがうまくいったのかな、と今感じております。

だから逆にPALROにレクリエーションの仕方を教えてもらったという感じを、ちょっと今印象受けますね。はい。

なるほど。はい。ありがとうございます。

落合さんお願いします。

はい。

眠りSCANを使っていうよりかは、このモデル事業のほうを通じていう感想になるんですけども、やっぱり、マンネリ化してしまう部分だったりとか、保守的になってしまう部分だったりというのがあるので、こういった機会をいただけたことで、変化することができたというか、新しいものを取り入れて、もっと利用者さんの益になることをしていけるんだっていう自信がついたんじゃないかなっていうふうに、思いますね。はい。

それが、施設全体としてちょっと変わったところかなと。

大きな収穫ですよ。

はい、そうです。

ありがとうございます。

小高さん、最後お願いします。

はい。

とですね、うちの施設は本当にロボットって何ってところから始めた施設だったので、本当に大変でした。

もう今振り返っても大変だったなあというのがありますが、今現在ですね、シルエット見守りセンサーのロボットですね、それがないと、もう、もうそれがないと夜勤はできないぐらいに本当に助かっております。

そして、今皆さんも大変だと思いますが、コロナの対策としてですね、新しい入居者様は、違うお部屋ですね、観察、観察をしなくてはいけないということで観察室のほうにですね、シルエットをつけさせていただきまして、職員ができるだけその部屋に入らないように、画面から利用者様を確認するというのを、違う使い方もさせていただいております。

はい。

本当、今回のプロジェクトは大変でしたが、参加してよかったなと思っています。

また何か埼玉県さんのほうで、そういうプロジェクトがあったら、もう一度参加してみたいなと思っております。ので、よろしく願いいたします。

ありがとうございました。

はい、ありがとうございます。

時間になりましたので、パネルディスカッションはこのへんで終了したいと思います。

ありがとうございます。

足立様そしてパネリストの皆様、ありがとうございました。

続きまして、すでに多くの施設で活用されているパラマウントベッド株式会社の眠りSCANをご紹介します。

眠りSCANは、マットレスの下に敷いた振動センサーによって、ベッド上の方の呼吸、心拍、寝返りといった、体から出てくる振動をセンシングしております。

そのセンシングしたデータをもとに、ベッド上の方が眠っているのか、それとも起きているのか、といったものをですね、判定をいたしまして、パソコンの上で表示をする、そういった機能を持っております。

実際の眠りSCANの実機はこちらになっておりまして、非常に薄型の振動のセンサーになっております。

眠りSCANをお使いいただく場合はですね、こちらの電源ケーブル、壁のコンセントにさしていただきますと、それで通信が開始するような、非常に簡易な仕組みになっております。

センシングしたデータに関しましては、無線LANを使って、パソコンの方に通信することができるようになっております。

こちら、黄色のアイコンがですね、ベッド上で、入居者の方が目を覚ましている、いわゆる覚醒状態になっております。

こちらブルーの背景のアイコンはベッド上で、ご利用者様が目を閉じて眠っていらっしゃる、いわゆる睡眠の状態になっております。

眠りSCANは、ベッド上に入居者がいるいないではなくて、覚醒睡眠と、より深い状態を表示をすることができるようになっております。

それ以外にも、ベッド上に利用者様がいらっしゃる離床の状態でしたり、また、起き上がりの状態というものを合わせて表示をすることができるようになっております。

それに加えて、眠りSCANは体から出てくる呼吸心拍の振動のデータをセンシングしていますので、このように、1分間当たりの心拍数と呼吸数、こちらもですね、リアルタイムで表示をすることができるようになっております。

で、実際の夜勤の状態になりますと、こちらのパソコンの画面の前にずっといらっしゃるというわけにはいかないと思います。

そういった場合に関しましては、こちらのスマートフォンの端末ですね、こちらにも、眠りSCANのアプリを導入することができますので、こちらを見ていただきながら、訪室をしていただくといったご活用も非常に多くされております。

例えば、三郷さくらの杜様は140床の特別養護老人ホームです。

10部屋を1ユニットとし、夜勤は1人のスタッフにつき、2ユニット、合計20人の入居者をケアされています。

夜8時から翌朝7時まで1人で対応されるので、スタッフの肉体的精神的な負担は大きくなりがちです。

負担を軽減するとともに、よりきめ細やかなケアをしたいという思いから、ベッド上に入居者の状態をリアルタイムでモニタリングする見守り支援システム眠りSCANを全室にご導入いただいております。

私たちパラマウントベッドは、眠りSCANのようなサポートツールを活用し、その効果がデータで見えてくれば、職員の皆様のモチベ

ーションアップにも繋がると思います。

今後、データをさらに駆使していくことで、より一人一人に合った個別ケアを提供し、自立支援をサポートしていきたいとします。